

令和 5 年 6 月 6 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00947

研究課題名（和文）東京大空襲の体験記と空襲記録運動に関する研究

研究課題名（英文）A study on the memoirs of the Great Tokyo Air Raid and the movement to record the air raids

研究代表者

山本 唯人（Yamamoto, Tadahito）

法政大学・大原社会問題研究所・准教授

研究者番号：50414074

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：『東京大空襲・戦災誌』第1巻所収の体験記原稿群（原稿コレクション）を整理し、目録・データベースを作成した。原稿1220件のうち956件の画像データを作成し、そのうち「本所区」「深川区」に収録された体験記185人分・241件の原稿を文字入力した。東京空襲を記録する会のメンバー・編集実務の担当者などに聞き取りを行った。体験記を活用した先進事例として広島平和記念資料館などを視察した。研究協力者を中心に研究会を開催し、体験記原稿を読解した。原稿コレクションの解題と体験記原稿の分析をまとめて報告書を刊行した。その成果を、2023年3月から東京大空襲・戦災資料センターの企画展として公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『東京大空襲・戦災誌』第1巻所収の体験記原稿群の整理・目録作成を行ったことで、原稿コレクションの内容を検索できるようになった。体験記が書かれるプロセスが形態上の特徴として残ったものを「原稿形態」と呼ぶ。「原稿形態」を適切に踏まえることで、体験記の批判的読解が可能になり、印刷された体験記を読むだけでは分からない様々な情報を得られることが明らかになった。東京空襲を記録する会メンバーへの聞き取りによって、『東京大空襲・戦災誌』の編集実務の一端を明らかにできた。また、広島平和記念資料館などを視察し、体験記の活用の可能性とその課題について把握できた。

研究成果の概要（英文）：1) I organized the experience manuscripts contained in Volume 1 of "The Great Tokyo Air Raid and War Damage Documents" and created a catalog and database. We created image data for 956 out of 1,220 manuscripts, and typed in 241 manuscripts for 185 people who wrote about their experiences recorded in "Honjo Ward" and "Fukagawa Ward" chapters.  
2) We interviewed the members of the association to record the Tokyo air raids and the person in charge of editorial work. We visited the Hiroshima Peace Memorial Museum and other facilities as an advanced case study of the use of memoirs.  
3) A research meeting was held mainly by research collaborators, and the manuscript of the experience was read. I published a report summarizing the commentary of the manuscript collection and the analysis of the experience manuscripts. From March 2023, the results will be exhibited as a special exhibition at the Tokyo Air Raid and War Damage Documentation Center.

研究分野：社会学

キーワード：空襲体験記 原稿 東京空襲を記録する会の継承 広島平和記念資料館 伝承者講話 『東京大空襲・戦災誌』 展示・教育への活用 戦争体験

## 1. 研究開始当初の背景

戦後日本の平和主義は、アジア・太平洋戦争を体験した広範な戦争体験世代によって支えられてきた。近年、そうした世代の高齢化が進むと共に戦争体験の継承が課題となり、その実態を知る有力な記録の一つとして、個人によって記された「戦争体験記」に注目が集まっている。

大門正克によれば、「1970年代は人びとの戦争体験を明らかにすることで、それまでの戦争像を問い直そうとする動きが広がった」時代であり、その代表的な活動の一つとして、東京空襲を記録する会(以下、記録する会)による空襲体験記の収集が挙げられた。体験記には、身体に刻まれた暴力を生々しく伝えるなど、公文書にはない独自の資料的価値があること、また、そうした記録は体験記を「書く者」とそれを「受けとめる者」との関係から生まれるものであることから、体験記を収集した空襲記録運動との関わりのなかで、体験記を分析する必要性が指摘された(『語る歴史、聞く歴史』岩波書店、2018年)。

一方、出来事の事後に書かれた体験記については、資料としての信憑性を疑う議論があり、必ずしも実際の歴史叙述に十分に生かされてきたとは言えない。さらに、1990年代以降、記憶論という視点からの研究が登場し、体験の語り方が創出されるプロセスや「書く主体」の位置に注目して、体験記を分析する研究などが展開した(成田龍一『「戦争経験」の戦後史』岩波書店、2010年など)。近年は「語られた体験」を主な分析対象とする社会学のオーラル・ヒストリー/ライフ・ストーリー研究などの成果を参照しながら、「書かれた体験」に特有の課題へのアプローチとして、エゴ・ドキュメント/パーソナル・ナラティブ論、感情史などの研究も登場している(長谷川貴彦『現代歴史学への展望』岩波書店、2016年、小野寺拓也「ナチ体制と「感情政治」」『思想』第1132号、2018年など)。

体験記の事後性・社会構築性を強調する記憶論以降のアプローチは、体験記の「読み方」に示唆を与える一方で、過剰な事後性・社会構築性の強調は、資料の信憑性をめぐる問題を呼び起こし、その歴史的資料としての価値を掘り崩してしまいかねない危険性を抱えている。歴史修正主義に翻弄される歴史学・歴史博物館などの現場では、「確かさ」への志向性から、公文書や古典的スタイルの実証主義が再評価される動きもある。

記憶論・歴史修正主義以降の歴史叙述の方法論、そして、体験者が減少するという切迫した状況を背景に、体験記をどう読み、歴史像の構築に活用するかは、歴史叙述のあり方をめぐる隠れた論争の焦点になっているのである。体験者個人にとって、事後に書かれた体験記の歴史的資料としての性格をどのように評価すべきか。体験記を用いた歴史叙述はどのようになされるべきか。本研究では、戦争体験記と歴史叙述のあり方をめぐるこのような問いに、1970年代に収集された代表的な体験記原稿コレクションである、東京大空襲・戦災資料センター保管の空襲体験記の原稿群の分析を通じて答えたい。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は以下の4点から構成される。

『東京大空襲・戦災誌』第1巻に収録された1945年3月10日の空襲体験記・401人分の原稿をスキャンした上で、書籍ではカットされた部分も含めた原文全体を文字データとして入力する。それをもとに、詳細な体験記データベースを作成する。

記録する会によって体験記が収集され、書籍として編集された経緯を団体の資料・関係者の聞き取りなどを通じて調査し、体験記原稿の歴史的資料としての性格を明らかにする。

1945年3月10日の「東京大空襲」の実態を、体験記原稿の詳細な読解により明らかにする。

本研究の資料保管施設であり、研究拠点でもある東京大空襲・戦災資料センター等で企画展を開催し、研究成果の展示・社会教育への活用方法について研究する。具体的には、画像閲覧システムの制作・歴史教育の専門家と連携し、展示パネルと関連づけて、スマートフォンなどのモバイル端末上で体験記原稿のスキャン画像を閲覧できるシステムを構築する。

## 3. 研究の方法

401人分の体験記原稿のスキャンと文字入力による資料のデジタル化を行なう。

体験記の分析方針に沿って、1945年3月10日の体験記原稿についてデータベースを作成する。

東京空襲を記録する会の団体資料の調査および関係者への聞き取りを行い、体験記原稿の収集過程と歴史的資料としての性格を明らかにする。

戦争体験記を研究・教育に活用した先進事例について、研究する。

画像・文字入力データとデータベースを用いて、体験記原稿を読解し、1945年3月10日の東京大空襲の実態を明らかにする。

研究成果を論文集にまとめる。また東京大空襲・戦災資料センター等で企画展を開催し、研究成果を発信する。

#### 4. 研究成果

本研究の成果は以下である。

『東京大空襲・戦災誌』第1巻所収の空襲体験記の原稿群（東京空襲を記録する会・東京空襲体験記原稿コレクション）を整理し、目録を作成した。その結果、同書所収の401人の体験記のうち、381人分の原稿が残されており、文書数は1220件であることが判明した。整理した原稿群は文書のまとまりごとに1220件の封筒に納め、それらの封筒群を箱に納めた。「本所区」「深川区」の185人分の体験記原稿については、「入稿原稿」「未掲載原稿」を中心に185人分・279件（541件中）の原稿をスキャンし（体験者ID3・寺崎治郎の「未掲載原稿」1件以外の全ての「入稿原稿」「未掲載原稿」を含む）、その他の196人分の体験記原稿については、原則として全ての原稿を対象に196人分・677件（679件中）の原稿を写真撮影した。「本所区」「深川区」でスキャンした原稿のうち、「入稿原稿」「未掲載原稿」の全てを含む185人分・241件の原稿を文字データ入力した。

目録に記事類型（大分類・小分類）と原稿形態分類（作成方法・整理方法・収集方法・編集方法）の項目を加え、目録機能を兼ねたデータベースを作成した。記事類型（大分類）は「体験記」「見出しページ」「そのとき」「空襲のあらし」「その他」の5分類、記事類型（小分類）は「入稿原稿」「未掲載原稿」「見出しページ原稿」「扉原稿」「整理札」「応募時のメモ」「手紙」「空襲のあらし原稿」「そのとき原稿」「そのとき扉原稿」「その他体験記付属文書」「その他」の12分類である。作成方法は「執筆」「手記転載」「聞き書き（文末記載）」「聞き書き（推定）」「執筆・手記転載」の5分類、整理方法は「本人」「近親者」「編集部」の3分類、収集方法は「投稿」「取材」の2分類、編集方法は「元原稿」「元原稿（リライト済）」「元原稿（削除）」「元原稿（複写）」「元原稿（複写）（リライト済）」「元原稿（複写）（削除）」「不明」の9分類である。

東京空襲を記録する会の主要メンバーである早乙女勝元、『東京大空襲・戦災誌』の編集実務に当たった川上一郎の聞き取りを行った。

戦争体験記を研究・教育に活用した先進事例として、広島平和記念資料館を視察し、合わせて広島市内の原爆関係の展示施設・戦跡などを視察した。

文字データ入力を担当した研究協力者を中心に研究会を開催し、体験記原稿の読解を通じて、1945年3月10日の東京大空襲の実態について研究した。

原稿コレクションの解題と、研究協力者による体験記原稿の分析をまとめて研究報告書『空襲体験記の原稿を読み、継承する 東京空襲を記録する会・東京空襲体験記原稿コレクションのデジタル化とその読解』（戦災誌研究会、2022年）を刊行した。またその成果を、2023年3月から東京大空襲・戦災資料センターの企画展「空襲体験記を書く、一冊に編む 東京空襲を記録する会が収集した空襲体験記の〈原稿〉展」として公開した。

本研究の意義は以下である。

『東京大空襲・戦災誌』第1巻所収の体験記のすべての原稿を整理し、保存措置を行った。それに伴って、原稿コレクションの目録（データベース）を作成し、原稿コレクションの全貌を、検索を通じて把握できるようになった。

口頭で伝承される体験談と異なって、体験記の特徴は、体験者による執筆、推敲、編者による修正、削除などのプロセスが、すべて記録となって原稿上に残っていくことにある。このプロセスが形になって残ったものを「原稿形態」と呼ぶ。「原稿形態」を適切に踏まえることで、体験者は何を重視して原稿を書いたのか、編集者はそのうち何を削除し、何を残したのかを読み取ることができる。その意味で、「原稿形態」の解明は、個人によって書かれた体験記原稿に資料批判の余地を与え、歴史叙述や教育への活用を促すものである。本研究では原稿の作成方法、整理方法、収集方法、編集方法の違いによって、原稿コレクションを分類し、入稿原稿については14種類、未掲載原稿については10種類の原稿形態に分かれることを明らかにした。

研究報告書、およびその成果に基づく企画展では、「原稿形態」を踏まえながら具体的な体験記の原稿を読解し、そこに書かれた1945年3月10日の空襲体験の実態を分析した。それらを通じて、空襲体験記の原稿を読むことで、本に印刷された体験記を読むだけでは分からない空襲体験記の内実を明らかにすることができるが示された。

東京空襲を記録する会の運動史に関する研究では、関係者への聞き取りによって、文献史料では分からなかった、『東京大空襲・戦災誌』の編集実務の一端を明らかにできた。

広島平和記念資料館を初め、広島に所在する原爆関連施設の視察を通して、個人によって作成・寄贈された資料の活用の可能性とその課題について把握することができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 石橋星志	4. 巻 第865号
2. 論文標題 東京大空襲を伝える博物館の試み	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 5-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小園崇明	4. 巻 第145号
2. 論文標題 関東大震災100年を迎える都立横網町公園	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 造園修景	6. 最初と最後の頁 18-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小園崇明	4. 巻 第52号
2. 論文標題 戦時下の「日常」について考える - 東京大空襲・戦災資料センターの展示リニューアルを事例に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 子どもが主役になる社会科	6. 最初と最後の頁 84-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石橋星志	4. 巻 第18号
2. 論文標題 「東京空襲を記録する会」の成り立ちと活動 『東京大空襲・戦災誌』編集を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』	6. 最初と最後の頁 41-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山本唯人
2. 発表標題 空襲体験記の原稿を読む 中間報告
3. 学会等名 第51回空襲・戦災を記録する会全国連絡会議東京大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山本唯人
2. 発表標題 空襲体験記の原稿を読む 『東京大空襲・戦災誌』原稿コレクションの整理と分析
3. 学会等名 法政大学大原社会問題研究所月例研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山本唯人
2. 発表標題 戦争体験の継承とフィクション物語 「余白」の文脈形成機能に注目して
3. 学会等名 日本オーラル・ヒストリー学会第19回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石橋星志
2. 発表標題 東京空襲を記録する会のメンバーと役割
3. 学会等名 第51回空襲・戦災を記録する会全国連絡会議東京大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小園 崇明・大滝 夢夏・山口 里沙
2. 発表標題 100年をつなぐ関東大震災の写真研究
3. 学会等名 第6回防災後重建歴史社会学及び防災減災教育国際検討会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小園 崇明・大滝 夢夏・山口 里沙
2. 発表標題 関東大震災の写真研究 - 被災写真からたどる東京下町
3. 学会等名 第55回千葉県歴史教育研究集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本 唯人
2. 発表標題 空襲体験を文字で伝える 東京大空襲・戦災資料センターの新展示「夜の体験」コーナーを中心に
3. 学会等名 空襲・戦災を記録する会全国連絡会第50回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小園 崇明
2. 発表標題 戦時下の「日常」について考えるー東京大空襲・戦災資料センター展示リニューアルを事例にー
3. 学会等名 第54回千葉県歴史教育研究集会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 蘭 信三、石原 俊、一ノ瀬 俊也、佐藤 文香、西村 明、野上 元、福間 良明	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 266
3. 書名 社会のなかの軍隊 軍隊という社会	

1. 著者名 吉田裕、東京大空襲・戦災資料センター	4. 発行年 2022年
2. 出版社 合同出版	5. 総ページ数 96
3. 書名 東京大空襲・戦災資料センター図録 いのちと平和のバトン	

1. 著者名 小園 崇明・大滝 夢夏・山口 里沙 編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 公益財団法人東京都慰霊協会	5. 総ページ数 38
3. 書名 図録・関東大震災写真展 - 被災写真からたどる東京下町六区	

1. 著者名 きたむらけんじ・西尾 静子・山本 唯人	4. 発行年 2020年
2. 出版社 次世代継承研究会	5. 総ページ数 78
3. 書名 演劇が語りなおすヒストリー-舞台『魚の目に水は映らず』と「静子」の空襲体験をめぐるアーカイブズ	

1. 著者名 山本唯人	4. 発行年 2020年
2. 出版社 下谷オフィス	5. 総ページ数 68
3. 書名 展示「名前と顔写真の壁」 経緯と概要	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>「空襲体験記原稿プロジェクトの報告書を刊行します。」researchmap山本唯人研究ブログ(2023.11.20)  <a href="https://researchmap.jp/blogs/blog_entries/view/99310/a3fb7dea676fdaf3e30b64143a499b8a?frame_id=698083">https://researchmap.jp/blogs/blog_entries/view/99310/a3fb7dea676fdaf3e30b64143a499b8a?frame_id=698083</a>  「企画展「空襲体験記を書く、一冊に編む 東京空襲を記録する会が収集した空襲体験記の&lt;原稿&gt;展」を開催します。」、researchmap山本唯人研究ブログ(2023.02.12)  <a href="https://researchmap.jp/blogs/blog_entries/view/99310/4768f06e0012ab91713e975f2a8da776?frame_id=698083">https://researchmap.jp/blogs/blog_entries/view/99310/4768f06e0012ab91713e975f2a8da776?frame_id=698083</a></p>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石橋 星志 (Ishibashi Seishi) (00817231)	大阪経済法科大学・公私立大学の部局等・研究員  (34427)	
研究分担者	小園 崇明 (Kozono Takaaki) (60768240)	東京成徳大学・人文学部・助教  (32521)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------